



詩 集

記 號 と 秩 序

杉 本 駿 彦

宇佐美好弘様

惠存

杉本駿彦

記 號 と 秩 序

詩 集

杉 本 駿 彦

記號と秩序

目録

目録

西曆千九百三十二年 東京旗魚社版

恩師 鈴木榮太郎氏に

自由なアチカの神々の飛揚が自由な
雅典の精神の飛揚を喚び起したのだ

ハウプトマン（希臘の春）

城田皓一譯百三十頁

第一
部

歸らぬ小鳥等

1

朝は逃ける翅に奇麗な色を興へた。

確に嫉妬を感じてゐた女の手は

後悔しなかつたであらう。

去つてゆく嬰！

籠から出てあんなにも遠くなる斑鳩が、

僕に背くものの美しさを知らした。

己にアンドレ・ジイドも本の中で言つてゐた。

——行爲の傍に来ては、言葉の色の

ああ、縋せて行くこゝよ。

けれぎ何物か、馳けてきて

僕の胸を翳のある蘭草のやうに戦がせる。

2

落日に浸された樹の間を

一羽の鶯が高く啼きながら飛びまはるので、
女の心は落著かぬ。

黄昏がカルフォオルニヤ、オピイの上に

躊躇ひがちの觸手をのぼすので

花瓣はひさりでに閉ぢてしまふ……

ここにある幸、不幸の分れ目も

女の假初の行動もそのやうに。

愛してゐる赤城産の鶯を逃したので、

初夏の間に春の姿が何時までも裾のやうに残つてゐる。

液

體

泣く喚く眩くものは

ニッフを喪した泉の周圍ばかりではない。

これをはつきり告げてをかう。……

煮沸する油の鍋には可憐な小魚がゐるた。

そのやうに僕もこの係蹄のなかにおちた。

壊れる組織と鐵の匂と

立ちあがり彼方を指して消えてゆくもの

迫る痛みと後悔と 少しの生を樂む心と。

寒にはまだ充分間のある夜。

僕に向つて腹をうごめかすダム湖があつた。銀色に横つて。

僕は秤る 感情と理性を。

僕は試す 未だのこる悪戯すきな少年の手附で。

僕の書齋

1

ここに一枚のペン書がある。
何が翳るのか、色のないその面に
空色がきて小鳥のやうに棲すまつてゐた。
チラチラする光を追ふて疲勞する僕。
ながい冬眠があつた。
そのあこには春がきた。

8

朧けな眼に春は點滴！　こなり一本のスペクトルを描いた。
僕は今でも、その美しい色彩を忘れない。
遠く離れていつたエミリヤよ。
おまへを圍む半島の春。
僕はおまへを追ひかけるだらう。光の波に包まれて。

2

僕は一羽の斑鳩いづなを飼つてゐる。
春がきたのに、未だ啼かないかれを。
嬰あやこ呼んで。

9

優しいおまへのイニシャルの記念に。

僕の拍つタイプライタアの文字e!

僕は工夫する。

昔おまへの好んだ花の形を抜くために。――

花を囲む無数のおまへよ。

僕は仕事を續けるだらう!

紙片に、空色のおまへが満ちるまで。

1

! ロシヤ映畫『春』

落日

工場のけむりが地平線を剪つてゐる。

僕は「アルルの落日」をおもつた。

それ程擴大された美しい野々町の眺である。

けれど一枚のゴッホの繪も僕はもたない。

あなたが呉れた鉢にはミモザが枯れてしまった。

太陽は風景のなかを靜々こ

赤く周邊を翳らせて

まるでオペラのやうに落下する!

春の發生

1

館の周圍の無花果たち。

色々の形をした若くて奇麗な無花果たち。

ある夜明に僕は起きてゐた。

傍にあるフラスコを把つて飲むこ

液體はガラスの中で羞しがる。

つまりこの素肌の娘(液體)は臆病である。

ガラスが極めてうすいために

自分孤り裸形であるこ知つたので

泣く娘、青い色に染められて。

なんこいふおまへは寒い肌……

月光は窓のなかにもあつた。

植物のうえには春近い粉雪がかかつてゐた。

2

僕が離れるこ液體は安堵する。

再び青い娘は眠りだす。僕を忘れて。
おお、このやうに静である無花果たち。
おまへの信念、おまへの待望！

明日こそは恐らく春であらう。

細胞、樹液に芽ぐむ力の容積。

いつ破るのか、硬い鱗片^{うろこ}を

いつまで冬眠のなかにあるのかご、

釋ねさうな顔をした春が近くにある。

おまへは出發するだらう。

透明な體をもつて。

春で包まれた氣流のなかに。喜んで。

僕も待つ。おまへのやうに。

一個の思念をもつて。

冬の意匠

凍つた山鳩の血が僕に弾痕を示す。

一片づつ巻られて白菜は水におちる。

ひかりは猫のやうにうなりながら、

空家の階段をかけめぐる。

いくらかも曆の紙がのこらない。

寒さがくる。

僕の狂つた磁針よ。

おまへの素直さは再び掌にかへらない。

発電し易い硫黄棒を床になけうつ。

音をたてて轉る。

僕はドイツの晴天をおもふ。

ふいに二階で窓がギイギイこなる。

僕の注意を裏ぎり　あらぬ方へからかひ運びながら。

時刻

地中海がゆれてゐる。壁の地圖の内部で混沌ミして。曙が呼吸する。けれど一杯の霧の影……

三時が示す針の位置を、まだ僕は経験しない。それは僕がねむつてゐるためです。

早くから醒めたのは、ベッドの傍のアモール達！
やがて四時、霧は徐々に溶解する。

五時になる。マルセイユから對岸アルジェエルへ引く青い航空線。

六時がうつ。浪のまねをして。

七時になる。平野を走る山脈。熱風がある。深林のあひだを昆虫類が爬行する。

八時。葉叢にむけて、舌を發射するカメレオン。

僕は恒に用意した。アフリカのためにシエリイ酒の壘を。ああ、身をやけよサハラ。僕はシエリイ酒を、熱砂の上に注ぐであらう！
けれど、可愛いおまへにはいつ逢へる。

九時。僕は笑つて起きあがる。

オアシスのなかに。オアシスのなかのアルジェリヤに。

方 向

速度は時間を縮める。

それと一緒に空間も。

たごへば地面に投げられる飛行船のかけは

少年らの遊ぶ雪吊りの炭素です。

従ふミニマムのかげ。弾性ある重力よ。

ライン河を通過すれば河はすこしの毛糸です。

雲は巨きなアトラスです。

すべてのこの世にある澤山の錯覺。

僕と一緒に走りながら

もつと別の世界を見せてくれ。

線よ、点よ、面よ。

正確な記號らよ。

僕のために壊れ僕のために集つてくれ。

僕はこの世に、その價值しか知らぬのです。

友情は外にある。

僕は窓のなかにある。



實に夥しいアモールらが招く。

しかし僕は何の心配も要らないのです。

突風はアトラスの肩や胸をちぎつて投げつけ

窓から完全に僕の姿を隠すのです。

それで近寄れるのです。朝にむかつて。

過去つたおまへよ。

夜よ、無知よ。

僕はおまへから遙に遠い。

僕は進む。更に新しく燃える曙に。

ああ、僕を包め戦慄よ。

書簡

北緯四十九度・五十度

東經百四十三度・百四十四度。

ふるびたサハリン海流分布圖をひらき

指尖で一區劃を辿れば、

白いテルペニヤ灣が掌に現れて。

敷香郵便局・十二月三日發。

正巳君からの書簡は一月近くなつて著いた。

剪れば封から思ひがけない

ロツペン鳥の鼓翼はたぎこ、

原始林の樹脂のかほりが卷出される。

正巳君。僕に、タライカ湖から展開されてる
サハリン・ツンドラの地圖を呉れないか。

僕の脳には濃霧が。正巳君！

そのピストルをひきつ放しては呉れないか？

君も夏はホロナイ河遡るだらう。

或は木材爆破・測量するだらう。

けれど既に凍りついた寒い敷香……

正巳君は製圖する。正巳君は劔を吊る。

北緯四十九度・五十度

東經百四十三度・百四十四度

ふるびたサハリン海流分布圖をひらき

指尖で一區劃を辿れば、

掌に重い冬の玻璃器のひびきがして。

僕の肋骨に

僕の肋骨に白い塊が引懸つてゐる。

それは丁度誰でも持つ蝶ネクタイの形をして。

次第にながくのびてゆく……

僕をからかふ病のやうに。

終に鮮明な岬となる。

美しいソレントを圍む春の波。

向ふに笑つてゐるのが椅子によるアンリ・マチスです。

ながい寒に僕はあきあきした。

三角筋にかかる冬の重量。

まだ冬眠のなかにゐる。而も僕は病床で。

怠屈な風邪を追ひたいこ

肺動脈は擾ぐ。

脳は無数のあかるい言葉をはぐくむ。

けれど暗の中に目を開けば春は遠い！

部屋に乾いた塵がまふ。

調度は秩序のない博物館のやうに亂雑である。

遊 戯

*Dreams and delicate fancies
Dance thro' a poet's mind.
naitin*

廣場にゆく空は透明だった。あをいリンネで少女らの上を掩ふ室内のやうである。空には十二の雲が泛んでゐた。シャンデリヤのやうに若いひかりは少女らの健康を祝した。少女らはその下で輪飛びあそびをした。地面に描かれた十二の圓！ それを一度に二つづつ脚をひらいたカヅヤさんが先頭で飛んでいった。春は少女らの蹠をくすぐり、少女らは高く笑ふ……

地圖を披く三十二の島がある。人々はこれをドデカネシヤミ呼んでゐる。

疲 勞

黄昏の烟のまはりには
やさしい天使たちの翼音がし。

何處かでパイプ・オルガンが鳴り
いつまでも森の小舎へミ響いてくる。

落日した遠い山壁の雪のうえに
再び一輪の可憐なさうびの花ひらく。

鳩は止めぎなく青空をしたふ。
私は一本のバットを吸ひたくおもふ。

第二部

曇り日の西須磨

部屋にはデリシアスが満ちてくる。
時々日脚が現れる。

その度毎に海は鈍く光を見せるだけだ。

友の手によつて窓が披かれ、又閉ぢられる。

ちらりとしたミモザの花。

海風に戦いでゐるのも。――

這入つてくる白い・白い・白い

エンプレス型の汽船ふね一隻！

明石から歸る時

激しい波の擾ぐ港口。

繫がれた帆船らの軋る音。

僅ばかり散らされた町の灯。

星のない空の下の酒倉や樹木ら。

荒天の明石よ！

左様なら！

古びたおまへの名前を後にして

私たちは神戸に歸つて行く。



鹽屋沖の燈臺が明滅した。

正確な時間をおいて現れる赤い光。

友だちの一人が咳ばらひをした。

遠くの方で汽笛がなつた。

静まらぬ私の頭腦の内部には

S・O・Sを打電するフランス船ミ霧があつた。

旅行通信

優れた兄を持つ悦に羽搏く僕の心臓。

一人はラグビーの笛を吹いた。

一人は空中散歩した。

一人は菜種色の輝く星を認めた。

皆がゐる。僕を囲んで。

自動車はメリケン波止場に向つた。

夕風のなかを、軽く動揺しながら……

郵船會社の建物のうえに在つた

多くの避雷針が、今も心臓の傍で光つてゐる。

僕を保つ、安全度ミして。

悦のあひだに過剰を警戒する、

僕の制動機！

雲の重量の下に内省する僕の memo……

兄に囲まれてゐても在る、一個の世界！

おお、無限へ続く時間。僕の占めるその一部。

Incline

有効な斜面から一本のロップが走り出る。

それは信用状によく似てゐる。

安堵して軌道を滑る船がある。

僕の注意の集る所には運轉工場がある。

ハンドルが動かされるこ

機械力は増大する。

奔流がある。

ベルトに映る白い波……

僕の若さは騒音のなかに消えるだらう。

軸の油のやうに

身體も汚れて捨てられるだらう。

流動する感情の近くへ

休止する船。

ゴルフ場

春の黄昏なので

明日をねがふ僕のうえに

海色の霧がしづかに降りてきた。

以前ながい間この街の模様を調べたので

ホテルの旗や、樹木や

のろのろ登つてくる坂下の雑沓らが

僕の地図のなかの北野町を憶はせた。

球を受留めるゴオルのやうに

陽をいつか隠してしまつた地平線。

僕は球の動作に従ひ

いま十八回路コースの中央にゐる。

海を見下す丘のゴルフ場……

パイプだけが仄な明を残してゐる

異邦人の手ミ、僕の手！

この徑

肌荒い叢から風が出て

黒い林に吸はれてゆく。

風に交はる、軽い十二月の羽根……

ながい影に常に歩く、あのひこの頸を

柔く包むボアによく似た雪片よ。

今日もあのひこに出會ひはせぬか？

この徑は一度だけ林の中に隠れ

白い運河に墜ちてゐる。

人生はかうしたものだ、さ昔、先生が教へた。

僕は今それをはつきり知らねばならぬ。

あの頃。僕はなんて馬鹿だったのだらう。

石を投げられた水面のやうに病む。

何がああひこの胸を泡立たすのか、

何がああひこの喉を塞いだのか、

ああひこは咳をする、咳をする……

現實は僕の上に、死んだ小鳥は雪の上に。

屋上庭園

僕はこの市を左様ならするため
扉を開く。白い正午だった。

見る。向ふの屋上庭園にも人がゐる。

彼が「おい」を呼べば僕も「おい」を叫ぶだらう。

彼が手を差出せば僕も握るだらう。

また誰かが、僕を彼を結んだら

恐らく一つになつて見えただらう。

それ程よく似た建物の旗の下にゐる彼。

彼の向ふには明い海港がある。太陽がある。

煙の掛るガントリー・クレエンを汽船の群。

僕は目で笑ひながら挨拶する。

いつかこの市を訪ねるために僕は働かう。

再び掌を把手にかけて小聲で言ふ「Aurevoir」

雷 雨

海戦があるやうだね、ミ唾を吐いた。
僕も左様、ミ友達に答へた。

雷雲の出た午後四時。

軍艦は西南にむかつて出發した。

水平線の雲はあだかも砲煙のやうに
時々遠雷を鳴らした。

海岸を辿るミ岬があつた。

陰からでる館にアンミ呼ぶ少女がある。

●手にもつ朱色の扇。

●立つてゐる、水色の衣裳着て。

お祖母さんは椅子に臥てゐる。

●膝にある手。

●手にある本。

●光が木の上で休息した。

己にお祖母さんは眠つてゐるのだ。

通を横切るミ門した扉がある。

三つの家族名を記した門の扉があげられるミ
海がある。

跳込臺は塗られてある。

立つてゐるトム。

垂直になつたジョン。

あつ　こいふ間もなく水煙があがる。

均整ある身體が親切な海に包まれたのだ。

この近くで解消する雷雲が

一様に風景を翳らせる。

僕は去るテントの方に。

こり残された僕の周囲の大粒の雨。

今海港は白紙のなかに泛び

秋にむかふ。

風の罷む刻には

バアゴラ柱の陰が傾いた故に、

はつきり匂切られた僕は何處にも逃げられぬ。

箱のなかの捕虜ミヨコのやうに。……

かの口の丘はあれであらうか？

異人墓地のリラの花は、今なほ咲くこいふか？

こはいへエミリヤの微笑も悲哀も（僕の青春さへも）

時は奪つて去るであらう。

夜になる前の赫かしい海景に
風は間もなく死ぬであらう！

やがてフランス領事館のひろい苑に
模糊として旗は萎え

旗のうえには、業すてに眠りに入つた緑茶の丘が見えるであらう。

死ぬ風、斷末魔の

途切れ途切れの海の風！

程近い噴上げも、薔薇のやうには敏く風を感じないだらう。

僕は立ちあがる。暗い椅子から。

するさ噴上げの向ふに、火の點いた街燈ランペンが孤つ現れてくる。

裏町の風

道を飾るあをい蔭。秋の午後。

僕は歩いてゐる蔓草や夾竹桃のつづく下。

裏町に屈折するひかりの強弱。

休む市場。誰もゐない日曜日……

花をつけた道の植物。

ながれる風。

僕は今しがた海岸通十番地から

廣場の柵を過ぎ、館を過ぎ

油槽・汽船・鷗またインノセントな懸崖を見捨ててここに來た。

その海風。ここにも風！

胸にクラリオンが烈しく鳴りだすのを

ぎうして聴かずに居られようか。

風の窸る、あかい花片こそ……

うたふ聲があまりに低いゆゑ

恐らく人々の耳には届かぬであらう。

僕の出發の合圖のうたが。

英國船入港

運ばれるアマリリスには

灰赤いアマリリスの影。

低くミブ鷗のあごには、白い鷗の影。

そこには虚像があり速さがある。

はやく實體にかへらうミ虚像は跡を追つてゆく。

そのまき一艘の汽船が進んできた。

九時の海風は吹きつける……

あつたかい波。

ひかる波。

燈臺をしづしづミ過ぎる胴體^{トレス}。

次々に剪られる吃水の線。

終に船尾。旗！ひるがへる旗。

英國船・Karmala・の入港！

旗にある三つの色彩。

そこに思考するこゝが出来ないか。――

色彩が構成する三つの階級を。

旗は動く。混亂する。

悲しい顔ユニオン・ジャック！

また汽船を追ふ汽船の虚像……

實體のまはりを、あせりつつ嘆きつつ

何處までもついてゆく。

若干の無駄

君は多忙なビジネスの間に、若干の無駄を愛するであらう！ 例へばチュリップに眠る蜜蜂のごみく、さてはまた芝生をあるく蠅のごみく……

見てごらん！ 公園の一隅に、背高いターバンの印度人等がシイソウ遊びの中にも、別に不思議なごみくではない。屢々パレットの上には過剰な白が。呑口からは液體が……

手巾のかけに

遠くにふるさとの丘が現れ

忽ち日向葵ミヅイラが消えてゆく。

速力計を讀めば、機械は爽な戦慄の帯を僕に示す。

去りゆく車輪のあまのやうに

若い歴史がねむつてゐる。

そこは白い道路です。――

僕はしつかり掴へる、過ぎた日のてふてふを。

黒い速力

熱ある汽罐の速力を感じたとき

僕は身を埋めてゐる花を投げようと思つた。

深夜の燃えさかる石炭のあひだに

僕の過去を焦がす匂があるだらう。

僕は窓に向つてゐる。

遠い思出なんか要もない顔附をして。

けれど僕の神経は黒い速力に牽れてゐる。

下り貨物列車が通過する。

一本の白い線があらはれて

運命のやうに僕を翻弄する。

——眞赤な月（今は湖心に沈んだか？）

——空に造つた創部きずよ。

——盲腸炎よ。

——何處かで碎けてしまった石板スレートの音が

（僕の胸を拍ちつける。）

僕は何物をも所有しないだらうか？

（否、答へる。）僕は重量を負ふた儘で。



窓に疾風のごみき速力を感じる。
数知れぬ手の断片が黒い速力の裡に現れ
僕を不思議な倦怠インニイにもつてゆく。

サイレンを鳴らせ黒い速力よ。

掻消せよ青い手よ。

やがて赤い後燈ひかりのあらはれるまで

僕は振子のやうに落著かない。

第三部



友 情

✽ 搭乗者・二等兵曹の場合

われわれは已に空中にある。

銀色の翼にあたる氣流をついて前進。

山本二等兵曹が操縦桿を把りつつ發聲した。

われわれ二人は送話管によつた。

増加した高度。

正確な自記高度計よ！

五百米・やうやく能登呂は鳥の假装によつて視界から隠れた。

と同時に厚岸灣はバノラマのやうに廣げてきた。

進路東北！ 根室へ。

北方の磁氣は精神を快活にする。

われわれは間もなく落石岬を通過した。

終に記録は豫定に達した。

課せられた上昇能力・三千米。

機上のわれわれは暫くこの高度を保つた後、

これを端緒としてあらゆる性能を實測した。

所要二時間。再び歸航についた。

灣。

千五百米。

順次に高度をさけた。

海面も縦割れのやうに近づいてきた。

フロオトは緩慢に風を切つてゐた。

右に。氷塊を避けて。

われわれの捜しあてた著水面がある。

機體は海面近くに位置しはじめた。

が俄に飛びあがつた鳥群！

行手を忙しく翔ける白鳥がある。

勿論これを避けた。

上向を試みた。

良好にゆかなかつた機體は顛覆した。氷上に。
われわれは反射的にそれを逃れた……

＊ 休息してゐた・白鳥の場合

あたし達は氷の間に休息してゐた。

その時あたし達の方に近づいてくる飛行機があつた。

雄は啼きながら飛びあがつた。

注意ぶかい精悍な雄よ。

あたし達も一齊に羽搏きして位置の移動をした。

あたし達の行爲はもう遅かつた。

機體からは火焰があがり爆音がひびいた。

あたし達は驚いてその周囲を旋回した。

＊ 解體中の北生れの・氷の場合

兄弟！

僕の刺青を見たまへ。

ながい僕の旅の記録であるこの肌に

あをく刻まれたオ・コ・ツ・ク。

僕はさうだ、他所者なのだ。

僕は海流から離れてここにきた。
が左様なら！　を言はねばならぬ。
僕は今故里にかへる時がきたのだ。
氣體ミかはつて。兄弟！
また何日か逢はうぢやないか。

化粧室

おまへの化粧はアンゴラ兔を思はせる。
撥條秤びんばかり(頸部)によつて、僕はおまへを秤る。
腕く重量、叫ぶ聲は力みなつて背きだす。
然し終に逃れぬだらう。僕の腕から。
泣ける裡に泣くがよい。時は再び來ないのだ。
僕はおまへの白さを奪ふだらう！
おまへが泣くのも構はずに。

意匠された人

娘らは一様に羽毛飾りをして

アルバムの中に藏はれる。

おまへの故里は、マルチニツクだ。

均整あるモザンビツクの土人よ。

おまへが象牙の傍に立つてゐるこ

おまへの身體は美しい調和を僕に與へる。

けれど重量と巨大さを誇る前に

おまへはもう一度考へるがよい！

おまへの祖先は百千の象牙を自由にしたが

唯一つのパイプすら今では自由ではないこ。

土人兵はアブダラの中で銃を持つ。

何がおまへを意匠ごしたか。

おまへは身動きもせず立つてゐる。

おまへは考へるだらうか、長い間の恩恵や保護に就いて。

黙つてゐる人よ、切手やタバコの中に

收められてゐる意匠された人よ……

僕は知つてゐる。

費された千萬の言葉よりも無言の中に、眞實のあるのを。

夜の 一部

藩^{カキ}にジャスマインの花開き萎んで

また新しい梅雨期がきた。

この季節では馥郁^{フク}とした匂も束の間だ。

ひみつの事實^{ジツ}として、

生きる意力を喪^クすこゝは恐^{おそ}しい。

Giovane^{ジョヴァネ}といふ言葉は何時まで信用されるだらう。

血液は刻々變^カるのだ。それもひみつの事實である。

最近、僕は昏い藪^{ヤブ}のなかで

過つて、長く保存してゐた賞牌^{カウチ}を喪^クした。

アポロを浮彫^{ウキ}した青銅^{クワダウ}は、僕の半生であつたのを。

夜になつてから僕は捜^{ソウ}した。

けれども何處にも見附からなかつた。

素直^{ソウジク}に眠^ネる蝸牛^{カミナリ}の多い藪^{ヤブ}のなかで。

而も、僕の周圍は盡く氣味の悪い闇である。

緑の冠

彼は焦けた菓子匂がした。

若さは常に彼の身體を温めてゐた。

彼の二十五歳は明るい健康のなかにあつた。

海風に鎧戸・窓掛が各の形で動いて

瓶の草花・蔓草の花がちらされても

向ふで把手をガタガタさせてゐても

太陽がサンルームで勝手に遊んで

ベッドの片端に光を照りかへしても

少女らのベッドは静である。

這入つてきたお母さんが調べるミ

A 嬢は苹果の匂を

Y 嬢は檸檬の匂を

N 嬢はバナナの匂を

夫々體型のままに残すだけ

何處を捜してもゐないのです。

今彼は二十五歳を踏みこえた。

するミ彼の緑の冠はいつか見えなくなつた。

失望ミ一緒に歩いてゐる少女らのお母さんミ同じやうに。

河 岸

蜜蜂の翅音が消えてから間もなかつた。

ある夜、ひそかに僕は窓をひらいた。

一枚の赤い更紗をもつて。

花模様の地色は褪せ、時は去り

而も埃が花さえ漠然としたものに變へた。

もはや匂はない。

もはや戻らない。

昔よ。鏡のある部屋の記憶よ。

そこに優しい少女がゐた。

西班牙風を好んでゐた、その少女。

笑ひながら髪を飾つた、赤い更紗を巻いて。

そこには調和と若さがあつた。

遠ざかつてゆく十七歳。

僕も曾てそこにゐた。

アンダルシヤの娘宛らの少女の目附も、

今も同じ春のなかに。

けれど臆病だつた僕の掌よ！

歸つてくるのは眠りも悔いの心ばかりだ。

河風は吹いてくる、吹いてくる。徒に空しく。

錯 覺

僕は電車のなかにゐた。

寒さはガラスに白いスクリンを。

僕の總ての指は衣囊にしまはれてゐた。

速力に伴ふ十二月の風は窓を敲つ。

盲斑は視線を遠ざかり、

嗤ひのごまく一個の顔を指し示す。

僕はそこに記憶を出す。祖母の言葉を。

(山姥はきこにでもゐるのだよ。)

やがて記憶は消えてゆく、巨きな顔と一緒に。

野に牝牛がゐた。

啼聲が電車のなかに流れてきた。

僕は一個のマルク・シヤガアルの繪を想ひながら

空間を馳けてくる牝牛の角を、

重量の錯覺の世界に這入つていつた。

次に、慄然としてこれを避けた。

電車は尙も走つてゐる、ガラスを鳴らしながら。

病 氣

私は竟に一つの形態を得た。

臥てる父を襲ふ(病氣)のエレメントは
透明になつた物であらう。

水母類の・Cyanea Nozakiに似た無数の。

潰さねば恐らく父は癒るまい……

私は、私の手を握る。

冬から春にかけての空模様。

雲が氣紛れにつくるスカンデナビヤ。
流れる雲。

戦慄くあらしの間を！

私は身悶へる。弱々しい私の内部で。

が返つて白いあらしのために倒れねばならない。

一體、私はこんなでよいのだらうか？

父の前でも……

日常生活の間でも。

陶土層

木々は伐られる。

角度をもつて光は投げだされる。

露出した地層は白く、彼に恐らく氷原の魔力をもつて迫り、過重な
負擔を與へるのであらう。

夕暮の雲。翔びちる鳩……

彼は獨白する（ああ、火のない世界よ！）

彼は杖をすてる。力竭きて氷アイスベラケル杖を放すやうに。

幾月も煙突は休止した。

已にわたり鳥の如く移動をはじめた職業群があつた。

彼もこの町を去るであらう。間もなく……

死骸のやうに流されて。

カオリンの斷層

良質のカオリンが山から出る。

幾臺も重量に迫されてトロツコが下つてゆく。

市ではそれを商品にするために待つてゐた。

山には光るカオリンの斷層があり、

市では濛々として黒煙が昇つた。

そこには火があつた。

或は憤怒として。

トロツコは幾度もなく山を往復した。

霖雨の跡でカオリンの含水は冷かつた。

掌は汚れた。悲むべき掌の作業よ。

山の松林は終に總て倒れた。

一塊、又一塊、斷層をはなれたカオリンは

谷隈の緑の屋根を包んだ。

それ以後、僕は再び鐘の音をきかなかつた。

五月

白衣の婦人が通る窓がある。

蒸暑くなるベッドの上には猫ご風。

ガラス戸の照返しに僕に葡萄の季を知らせる。

上昇する寒暖計。流れる水こ

實るマスカットの匂ひ。

夥しく蠅は室内を飛ぶ。

僕の顔を襲ふくろい唸りこゑ。

吹拂ふ僕は。おそろしく口を歪めて。

蠅の舌部・眼部擴大。脚部擴大。

むかふに旋回し墜ちてゆく、蠅蠅蠅。

海が光つてゐる。

青い面を走つてゐる午後の巡洋艦は

夜になつてから運河を多分遡るだらう。

耳のうしろを搔けばさわぐ

僕の血管！ それは指に答へる五月です。

呼動のやうに續く僕の病氣は

日課ある生活に、ひこつの休息を與へてゐる。

午 後

櫻の樹から葉が落ちる、葉が落ちる。

速力ある落葉には風が……

馳けてゆく方向には僕の神経が。

午後の明暗を馳ける落葉を

僕はシネ・コダックで撮さう。

若ここにシネ・コダックがあるのなら。

僕は僕の神経のあみを残さう。

落葉よ。秋の黒い線よ。

フィルムに巻かれて僕は悲鳴をあけるだらう。

ああ、かなしみの加速度よ！

白と黒

ベッドに轉つてゐるミ、ながい黄昏は動かない時計のなかの時刻のやうだ。

僕の内部のシユザンヌは白い雪溪たにに倒れたいつぱんの椗である。冬。また春そして今はおそ春。ミは言へ裸身のままのシユザンヌを、僕は思ひたくはないのである。ものうい眼窩からおきあがつて次第に去りゆく疲れた春よ。

窓をひらけば春はさる。

風はおこり部屋のレエスの蝶を真似る。

立ちあがるミ、僕のねまきの皺は消え、墜ちてゆく無数のほかない雲脂。ひくい新月が海にある。椅子をかたよせるミ初夏のおもたい手應がある。海にむかつてくだつてゆくアカシヤ並木の白い花。

卓上にひらいた厚い帳面カーエ。

レエスをくぎる表紙の線。

不圖、むかふを見るミ、露臺では、ローランサン風の扇がしきりに動いてゐる。そしてしづかなアカシヤの香りがここ迄。

僕はカイエの内部を、白きいろごり故に愛してゐた。紙には残るシユザンヌ。ただ一綴り……

然し、ほんミ表紙をこちるミ、新月の沈んだ海面よりもくろい。

もうシユザンヌはぎこにもゐない。部屋の中も眞暗になる。

夕 暮

豪雨の後で明るい夕暮りになった。

雲は一枚の金色の楯を包んで私を擁護した。

少し開けられた空の戸棚。

その向ふに何が在るか。何が起つてゐるか。

家々の燈は點かず、ニュースの時間も未だ來ない。

それだのに光を指して急いでゆくのは何だらう？

花の萎れた西の藩かきに凭れて、夜までの

時間を（アルネ）を読むに費す私。兩足を優しい叢のなかに浸しながら。私の周には黄昏がある。露がある。白い石塊がある。羽虫の唸りがある。泉の傍から小さな腹の赤い蛇が出て、直きに戻る。それらや、書物の頁を撥ねる私の手が時間を次第に奪つていつた。

私の頭上を掠めて啼いたのは五位鷲だつた。

女よ！ おまへも随分ご用心するがよい。

球に這入つてゐる人形の型體かたちは誰もが知らぬ。

私もそのやうに藏つておかう。私の心を。

だからおまへも漫に私の心を探らぬがよい……
若も思はぬ針が、おまへの掌を傷つけるさいけないから。

記 號 と 秩 序

Lyric poems.

(1930—1932)

覺書

僕は千九百三十年以後、一つの實驗をしてゐた。如何にすれば、數多くの記號の中から秩序が得られるか、集合された記號「語彙」を社會生活の因子「經驗」にから、それだけを選び、如何なる方法に依つて構成されるかを問題とした。これらの背景となるのは、新精神の存在に他ならない。この點でも、旗魚は僕にまつて有益な實驗室であり、絶えず失敗を反覆しつつ僕は道程を追求した。

詩集は、最初「液體」にする考であつた。

流動し止まぬ心情を漠然とした不安を伴つた自己（註一）を名附

けたのであるが、これを改めて、「記號ミ秩序」にしたのは時日の経過による、思考の變化ミするのである。

今から思ふミ畏敬する諸兄(註二)に液體を語り過ぎたこゝを恥ぢてゐる。

装幀に關しては、村野四郎氏から懇切な參考資料を受けた。それを基ミしてプランを創造した。佐藤一英氏ミの間に往復した文書は題名に就いてであつたが、再三に止まらなかつた。終に僕は、僕ミ前記二氏の意見ミをその儘出して、友人龜山巖氏に圖つた。

挿繪に就いても、ジャン・ユウゴオの作品を用ゐるつもりでゐるが、今までに見たのも十枚餘りに過ぎなかつたので、之を斷念し、龜山氏の案出せるCompositionを用ゐるこゝにした。これに依つて僕

は佐藤氏の指摘された缺點の補足ミ村野氏の慫慂された點の助長も出來得るこゝミ思つてゐるが、この點の成功があるミすれば、この部分の完成は僕の功ではなくて龜山氏の苦心の當然現れたものであらう。

詩集中で、發表に際して詞書の附してあつたものも二三あるが、都合上これを略し、改めて僕の青春期を導いて下さつた、尙今後も指針ミなつて下さるであらう鈴木教授に、僕は「記號ミ秩序」を捧げる次第である。

(註一) 鈴木教授は「春の發生」の中から僕の言葉を拾ひあげて、僕の内面の批評を下さつた。

(註二) 神戸海港詩人俱樂部の福原・龜山・竹中・山村氏 名古屋の高木斐瑳雄氏

内 容

第 一 部

春 の 發 生	落 日	僕 の 書 齋	液 體	歸 ら ぬ 小 鳥 等
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
12	11	8	6	3

曇り日の西須磨	35
明石から歸る時	36
旅行通信	38
Incline	40
ゴルフ場	42
この徑	44
屋上庭園	46
雷雨	48
風の罷む刻には	51

第二部

冬の意匠	16
時刻	18
方向	20
書簡	23
僕の肋骨に	26
遊戯	28
疲勞	30

五	カオリンの斷層	陶	病	錯	河	綠	夜	意匠された人
月	土層	氣	覺	岸	の	冠	の	一部
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
88	86	84	82	80	78	76	74	72

第三部

化	友							
粧	情							
室								
⋮	⋮							
⋮	⋮							
⋮	⋮							
⋮	⋮							
71	65							
		黒い速力	手巾のかけに	若干の無駄	英國船入港	裏町の風		
		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮		
		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮		
		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮		
		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮		
		60	59	58	55	53		

挿	覺	夕	白	午
			ミ	
繪	書	暮	黒	後
		⋮	⋮	⋮
		⋮	⋮	⋮
		⋮	⋮	⋮
		⋮	⋮	⋮
		⋮	⋮	⋮
龜	著	95	92	90
山				
巖	者			

Composition

同じ著者に依りて

曆 地 圖 一九三〇年・五月(詩集) 絶版

記 號 秩 序 一九三三年・九月(詩集) 新刊

海 森 の 石 像 たち (隨筆) 未刊

ポ ム ペ イ の 犬 (詩集) 未刊



昭和七年八月二十日印刷
昭和七年九月一日發行

限定版・壹百部

詩集 記號と秩序

定價金壹圓

著作者

杉本 駿彦

發行者

東京市外濠橋町角管九二 田中方
村野 四郎

印刷者

名古屋市中區中ノ三丁目二十八番地
眞野 大助

電話本局〇八一五番

東京市外濠橋町角管九二 田中方

發行所

旗魚社

